

共に生きて I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

おなかの命は… 不妊症

◇◇3

を感じる。周囲から気遣われても笑顔をつくる気力すらなかった。夫は「妻を支えなきゃ」との意識が強く、家でも泣けなかった。

実感がある。久松さんは流産後、なかなか妊娠せず不妊治療を受けた。体外受精を試みたが妊娠に結びつかない。その度に「妊娠しなければ流産もしない」とほっとしている自分に気付いた。流産の傷は自覚以上に深かった。

厚生労働省研究班の報告では、カウンセリングを受けた人の出産成功率は71・6%で、受けなかった人より約30%高いというデータ(2008～10年)もある。また、検査で原因を明らかにしたり、医師が治療方針を丁寧に説明したりすることで、不安やストレスの軽減につながり流産率を下げるという。

《5回の流産と3回の死で順調だった。ところが、産。10年以上、不妊症と向き合ってきました。生まれこなかった魂はどこへ行くの？ こんなに努力したのに報われないの？ 考えない日はありません。私って欠陥品なのかな…》

《毎晩のように夜中に目を覚まして泣き叫びました。赤ちゃんのことが頭から離れなくて。羊を数えて朝を待ちました。そんな時あるホームページ(HP)に出合ったんです。そこには、私と同じ感情がうつらうつらしていました。悲しみ、ね

ただ、不妊症の相談窓口は少ない。初期の流産は家族や周囲から子の死と認識されないこともある。

福岡県内で暮らす裕子さん(44)「仮名」は、血栓ができやすいために流産を繰り返すと診断された。治療薬を飲み、自己注射もした。そのかいあって2003年に長男(10)を出産。その後もきようたいをつくってあげたい一心で治療を続けた。

「ハートビートくらぶ」。このHPを運営する当事者団体で02年に設立された。東京を中心に講演会や患者ミーティングを開き、遠方からの参加もあるという。HPには不妊症に関する知識をまとめ、多くの体験談も会員用の掲示板に掲載している。

「不妊症友の会「ハートビートくらぶ」ホームページ」<http://www.heartbeatclub.jp/>
◇不妊・不育とこの相談室 086(2)35(6)542。電話、来所での相談は無料で、毎週月、水、金の午後1時～5時、毎月第1土、日曜の午前10時～午後1時。

癒えぬ傷 体験者が支え

ため、いら立ち…》

組んでいる。不妊症の女性は妊娠中、常に流産の恐怖を抱える。次の健診までの不安を少しでも軽くできたら、との思いからだ。

06年冬のこと。7カ月までの子。家族で火葬した。残ったお骨はわずかだった。夫(46)ともども心身のバランスを崩し、心療内科に通った。人の妊娠を喜べない。赤ちゃんを見ると苦痛

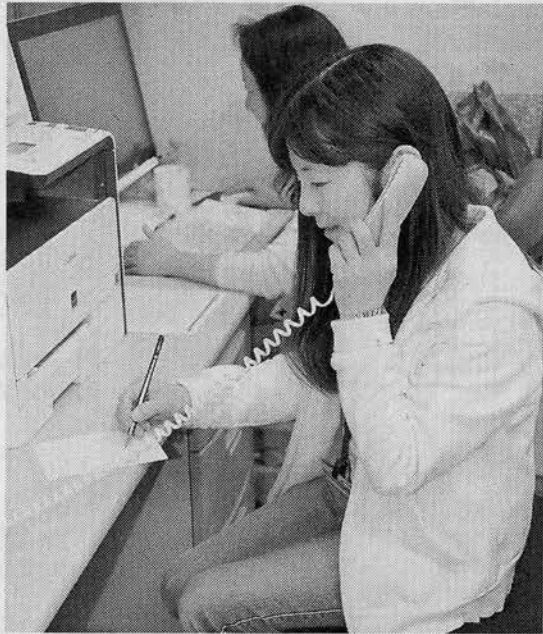
《東京であった当事者同士の集まりにも駆けつけました。思いを吐き出して気持ち軽くなった気がします。私だけじゃないんだって…》

不妊症外来もある。患者を調べると、8%に不安障害、6・2%にうつ病の傾向が見られた。妊娠が分かった際のうれしさは、流産や死産の回数が増えるほど低くなっていったという。

「流産としっかり向き合いたい、心を整理する場が必要なんです」。そう話すのは理事を務める久松美香さん(52)。自身も30代で2度流産した経験があり、言葉に

《2年前の流産を最後に治療から距離を置きました。おなかの中で亡くなった赤ちゃんの遺骨は、今も寝室にあります。納骨しようと思ったこともありません。でもまた、踏み切りがつかない。私が流産したと、おなかの中で亡くなった命…。何か意味があるはず。前を向いて、その答えを探そうと思います》

岡山大学病院にある「不妊・不育とこのころの相談室」。岡山県の事業として04年に開設された。相談は県内に限らず、全国から寄



全国から不妊症の相談が寄せられる岡山大学病院の「不妊・不育とこのころの相談室」。関連する書籍やDVDの貸し出しも行っている

岡山大学病院にある「不妊・不育とこのころの相談室」。岡山県の事業として04年に開設された。相談は県内に限らず、全国から寄